

令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号：34202

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20072

研究課題名（和文）日韓の幽霊（鬼神）表象の比較研究

研究課題名（英文）Comparative Study of the Representation of Japanese Ghost Yurei and Korean Ghost Guishin

研究代表者

朴 美ぎょん（BAK, MIKYUNG）

平安女学院大学・国際観光学部・助教

研究者番号：60908044

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、植民地時代から現代までの日韓の幽霊表象を時系列順に検討した。まず、軍事政権期の鬼神表象について、2022年9月のカルチュラル・スタディーズ学会で「1960年代の韓国映画における鬼神イメージ 日本の幽霊の影響を中心に」というタイトルで口頭発表を、2023年5月に国際学会ACAHで「軍事政権期の女性表象：テレビドラマからみる女性幽霊を中心に」というタイトルで口頭発表を行った（発表動画はオンライン公開中）。そして、90年代以降について、韓国人のドッケビ（妖怪全般、鬼神も含む）認識に関する論文「韓国の妖怪ドッケビの世代別認識調査」が『平安女学院大学年報』23号（2023年）に掲載された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、テーマや視点において新規性を持っている。まずテーマにおいては、幽霊と鬼神の影響関係に関する研究は幽霊画など平面に注目したものが多く、本研究は幽霊・鬼神のしぐさ、舞台演出なども含めた総合的な考察であること、また、今まで研究が少ない韓国の軍事政権期、公式的に日本の大衆文化交流が禁じられた時期における大きな影響に注目している点に新規性がある。視点においては、本研究は女性の欲望や恨みの変化に注目しており、核家族化など家庭の形の変化や女性の社会進出などの性役割の変化がもたらした社会の不安と恐怖に注目し、鬼神の恨みを個人のものではなく社会的問題に還元して考察している。

研究成果の概要（英文）：In this study, I examined ghost representations in Japan and Korea from the colonial period to the present in order. First, I did an oral presentation on the era of the military regime (from the liberation of the Japanese colonies to the 1980s) at the Cultural Typhoon in September 2022 under the title "Images of demons in Korean films in the 1960s: Focusing on the influence of Japanese ghosts." In May 2023, I did an oral presentation titled "The Representation of Women During the Korean Military Regime Era: Focusing on Female Ghosts (Guisin) in TV Series" at the International Academic Forum (iafor) ACAH (published online). After the 1990s, the results of a survey on Korean perceptions of Dokkaebi (Monsters and Ghost) were submitted to the Heian Jogakuin University Annual Report No. 23 and published in 2023.

研究分野：現代文化

キーワード：鬼神 ドッケビ 妖怪 幽霊 視覚文化 表象文化

1. 研究開始当初の背景

超自然的あるいは神話的な存在を一般的に表現する時、日本語であれば「妖怪」「幽霊」「鬼」、英語であれば「goblin」「ghost」「fairy」「monster」といった言葉が用いられるが、韓国語でそれにあたるのが「ドッケビ (도깨비)」と「鬼神 (귀신)」である。それらは韓国(朝鮮)の説話や怪談の中で古くから語られてきたものの、その姿が視覚的に描かれることはほとんどなく、描かれ始めたのは日本による植民地時代(1910～1945)に入ってからであった。そのなかでも「鬼神」という単語は女性の幽霊を指すことが多く、その典型的な視覚イメージは、白い服、乱れた髪、口元から血を流し、足元は見えぬ宙に浮いているといったもので、日本の幽霊の視覚イメージと共通の特徴を有している。本研究は、韓国の鬼神と日本の幽霊の類似点を分析して行く事で影響関係を明らかにするだけでなく、その相違点にも注目する。韓国の鬼神表象には、植民地時代以後、輸入された日本の幽霊イメージが定着していく過程で韓国の土着信仰や固有文化も加わり、韓国文化の特徴とも言われる儒教的文化が色濃く残るようになっている。

鬼神は無念な死を迎えた人があの世に行かず恨みを晴らすためにこの世に残ったのもので、様々な形で退治または成仏される。その恨みを検討することでその時代の価値観や社会的問題を考察することができ、その退治や成仏の方法を検討することで宗教観や生死観を考察することができる。特に、本研究で主に扱うのは女性鬼神の話であることから、韓国社会が抱えていた女性観や家族観の変遷を考察することにもつながる。このように、幽霊／鬼神の視覚イメージを研究することは、日韓の人々の世界観、価値観、想像力のありようを知るための手がかりとなるのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、韓国の大衆文化に現れる女性の幽霊／鬼神の表象を通して、韓国の社会観、家族観、女性観の特徴や変化を考察すること、さらに、日韓の幽霊／鬼神の表象のそれぞれの変遷および互いの影響関係を様々な視覚的・映像的資料に基づいて時系列で辿ることによって、両国の文化的な共通点および差異を明らかにするとともに、植民地時代から現代までの日韓文化交流史の一端を明らかにすることである。

具体的には、韓国の鬼神を対象として、その性格と視覚イメージを韓国の大衆文化、主に映像文化、ドラマ・映画を中心に時系列に分析する。対象となる時期は韓国が日本の植民地となった1910年から1990年代までに幅広く設定しており、大きく4つの時期に分けて考えている。植民地時代、60年代-70年代、80年代、90年代の韓国の大衆文化政策はそれぞれ大きく異なるため、その時々々の社会・経済・日韓関係などの国際関係などの時代背景と照合しながら検討する。

また、本研究の独創的な視点として、鬼神の恨みを個人の恨みとしてではなくその時代の社会が抱えている問題として捉え、時系列に鬼神の表象を考察することで、時代ごとの社会問題、女性問題、家族問題のありようを検討する。韓国では時代ごとに女性の欲望や恨みは変化しており、核家族化、女性の社会進出、共働きの家庭や一人親家庭の育児問題、教育熱と過剰な競争問題、いじめ問題などの社会の変化がもたらした不安と恐怖が、映像文化のなかで鬼神として可視化されている。日韓の抱えている社会問題は似ているものもあるが、異なるものもあり、その類似点と相違点は鬼神の表象にも現れている。

3. 研究の方法

本研究においては、植民地時代から現代までを上述した4つの時期に区分して、日本の幽霊が韓国の鬼神イメージの形成に与えた影響を各時期の社会的状況を踏まえつつ明らかにしていくことによって、新たな視点—すなわち、妖怪文化という視点、あるいは、女性の幽霊／鬼神の視覚イメージを多く扱うことから女性文化という視点—から日韓文化交流の歴史を改めて顧みることが可能になると考えている。

そのため、本研究は、植民地解放から現代までの時期については、日本の映画、ドラマ、アニメ作品などの流入について検討するのはもちろん、そうした影響のもとに韓国国内で制作された映画、ドラマ作品なども検討している。

植民地時代については、日本の映画や歌舞伎などの舞台芸術がそのまま朝鮮半島で上映・上演され、そこで登場する幽霊イメージが朝鮮の人々に伝播したことを当時の新聞記事などを調査して明らかにする。特に、京都大学以外にも日本国際文化研究センターの浮世絵のデータベースや、立命館大学のアトリサーチセンターも浮世絵はもちろん現代パフォーマンスの舞台写真などまで充実した視覚イメージのデータベースも調査する。

そして、60年代-70年代、80年代、90年代については、韓国に3回に渡って現地調査に行き、韓国の国立国会図書館と国立中央図書館で資料調査を行なっている。また、大田の国家記録院に記録を申請し、ソウルの映像資料館で現地のみで一部観覧が認められている資料を閲覧している。

4. 研究成果

本研究では、前述したように、①植民地時代、②植民地解放後70年代までの軍事政権期（朴正熙政権）、③第2の軍事政権期である80年代（全斗煥政権）、④民主化進行中でもあり日本文化解禁が行われた90年代、の4つの時期に区分して検討している。

研究成果をまとめると、①植民地時代を除き、全ての時期については国内外の学会で口頭発表を行っている。まず、②の時期について、2022年9月のカルチュラル・スタディーズ学会（Cultural Typhoon 2022）で「1960年代の韓国映画における鬼神イメージ—日本の幽霊の影響を中心に—」というタイトルで口頭発表を行った。本発表では、1960年代の韓国ホラー映画のなかで女性鬼神が登場する代表的な作品として、1966年の『殺人魔』と1967年の『月下の共同墓地』を具体的に検討した。この2作品の主要場面の分析を通して、日本の江戸時代の怪談歌舞伎の代表作である『四谷怪談』の影響について分析し、併せて、日韓における幽霊／鬼神表象の比較も行った。本発表の内容を簡単にまとめると、1960年代は韓国映画の黄金期と言われており、海外映画が多数紹介されるとともに、韓国国内でも多くの映画が制作された。そのなかにはホラー映画も多く含まれており、それらの作品の監督のほとんどは（上記2作品も監督も含めて）日本での留学経験を有していることは注目に値する。また、1960年代は朴正熙による軍事独裁政権期でもあり、1966年8月3日の第2次映画法改正による表現規制や、1967年4月1日に始まった韓国映画業者協会脚本審議委員会による自主規制などといった出来

事も、ホラー映画における鬼神表象の形成に影響を与えた。例えば、検閲が強化された時期に制作された作品ではホラー映画であっても教訓的であることが重視されており、儒教的に理想とされる良妻賢母の女性が鬼神になることが多かった。このような儒教的価値観は身分制度があった朝鮮時代の政治哲学であり、階級の中で忠・孝・義を守ることを美德としており、階級関係を重視する軍事政権の政治哲学に合致しているために強調されていた点を指摘した。

また、③の時期について、2023年5月に International Academic Forum (iafor) ACAH 2023で“The Representation of Women During the Korean Military Regime Era: Focusing on Female Ghosts (Guisin) in TV Series”というタイトルで口頭発表を行った（発表動画はオンラインで公開中）。

本発表では、1980年代～90年代の人気テレビドラマ『伝説の故郷』のなかで描かれた女性鬼神に焦点を当て、それが当時の韓国社会や女性のありようをどのように映し出していたのかを検討した。まず、鬼神のエピソードを未婚女性、既婚女性、未亡人に分けて検討した。具体的には、新婚初夜に夫に捨てられた未婚女性の話である「緑灰赤灰」、母になれなかったことで死に迫いやられた既婚女性の話である「墓の中の赤ん坊」、寡婦の再婚を禁じ、厳しい貞操義務によって殺されることになった女性の話である「烈女門」のエピソードを検討した。

いずれのエピソードでも、朝鮮時代の女性が儒教的美德としての「良妻賢母」や貞節を重んじる「烈女」イデオロギーによって抑圧されており、それらの価値観を批判しているようにも見えるが、実際には当の女性たち自身もそうした価値観を内面化したうえで苦しんでおり、女性に犠牲を求める社会的雰囲気を作りだしていた。さらに、軍事政権期の検閲の影響で、ドラマにおいても教訓的なものを作る必要があるために、このような儒教的美德を韓国の精神として強調するものが繰り返し作られていた。

また、本発表では韓国独特の情緒と言われる「恨（ハン）」イデオロギーを作り上げていくなかで、社会からの理不尽な抑圧を受けた女性はその苦しみを訴えはしても、不合理な現状の変革を要求することなく最終的には自らの境遇を受け入れる、という受動的で卑屈な心のありようを意味している点を指摘した。今後、「恨（ハン）」イデオロギーの形成と定着と変化については独立したテーマとして別の発表や論文の投稿を考えている。

そして、④の時期については、韓国人のドッケビと鬼神に関する認識調査の結果を2022年5月の怪談文芸研究会で口頭発表し、また本発表について的一般紙への寄稿として、2022年9月に出版された雑誌『怪と幽』vol.11に研究会レポート「韓国人の描くドッケビと鬼神」を寄稿した。また、論文「韓国の妖怪「ドッケビ」の世代別認識調査」を『平安女学院大学年報』第23号に投稿し、2022年版（2023年3月出版）に掲載されている。本調査は、韓国国内での3回に渡るインタビュー調査の結果をまとめたものであり、世代ごとで見られる認識の差異を明らかにしたものである。視覚イメージについて、50歳以上の高齢世代ではドッケビと鬼神のいずれについても人魂や鬼火のような灯りとして描いているものが多く、30代や40代の中間世代ではオニのような角があり毛皮を纏い金棒を持つ典型的なイメージで描いているものが多く、若い世代、特に13歳以下（小学生まで）では怪物、おばけ、妖精を含めて多様化する傾向が見られた。また、その性格について、高齢世代ではドッケビ・鬼神を「怖い」と答える傾向が強く、

それに対して若い世代では「正義の味方」や「明るく面白い」という答えが多く見られた。最後に、ドッケビや鬼神を見たメディアについて、体験を重視してドッケビや鬼神を畏敬の対象として考える高齢世代と、大衆メディアに登場する娯楽物として考える若い世代との間で認識の差が大きく、特に 13 歳以下の子供の答えに海外のアニメやマンガの翻訳版が多かった。このような結果から、韓国の鬼神やドッケビの表象は時代と共に変化しており、世代によって認識にも大きな差があるということを確認した。

なお、①の時期については、2023 年 7 月 30 日の怪談文芸研究会での口頭発表を予定しており、立命館大学アトリサーチセンターの学術誌『アート・リサーチ』への論文投稿を準備している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 朴美ぎょん	4. 巻 23
2. 論文標題 韓国の妖怪「ドッケビ」の世代別認識調査	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 平安女学院大学年報	6. 最初と最後の頁 54-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 朴美ぎょん
2. 発表標題 韓国の鬼神とドッケビの世代別認識調査
3. 学会等名 怪談文芸研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 朴美ぎょん
2. 発表標題 1960年代の韓国映画における鬼神イメージ 日本の幽霊の影響を中心に
3. 学会等名 カルチュラル・スタディーズ学会（Cultural Typhoon）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 朴美ぎょん
2. 発表標題 児童翻訳書の中のドッケビ表象に関する考察
3. 学会等名 韓国ドッケビ学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 MIKYUNG BAK
2. 発表標題 The Representation of Women During the Korean Military Regime Era: Focusing on Female Ghosts (Guisin) in TV Series
3. 学会等名 International Academic Forum (iafor) The 14th Asian Conference on Arts & Humanities (ACAH) 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 朴美ぎょん	4. 発行年 2022年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 2
3. 書名 「韓国人の描くドッケピと鬼神」雑誌『怪と幽』vol.1	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------